

早稲田大学大学院 創造理工学研究科

# 博士論文概要

## 論文題目

江戸幕府小普請方大工棟梁  
柏木家に関する研究

Study on KASHIWAGI Clan of KOBUSHIN-KATA Carpenter  
Leaders of Edo Shogunate

申請者

佐々木	昌孝
Masataka	SASAKI

2014年12月

本研究は、小普請方大工棟梁家のうち柏木家を研究の主題とするものである。小普請方大工棟梁柏木家が、史実に登場するのは江戸時代寛文期のこと、宝永二年（1705）の記録に見られる寛文九年（1669）の書状の覚え書きに「一、三人扶持 大工棟梁（柏木）伊兵衛」とあるのが御役料を与えられた柏木姓大工棟梁の初出である。小普請方大工棟梁として幕府工事に従事したことが知られているものの、その出自・家系は不明とされてきた。

そこで本研究において、新たに筆者が発見した資料を用いながら、以下の点を明らかとした。一に、多聞櫓文庫より発見した柏木家関連文書を用いて、伊兵衛家と太郎右衛門家に分かれる柏木二家それぞれの家系を復原した。二に、柏木家が大工としての生業を興すに至ったその時期と契機について、個人蔵の新出資料『上棟一通』等を検証しながら明らかとした。

本論文は、序章、本論（3章）、終章、資料編から構成されている。序論では研究の背景を記し、本論文の目的と、各章の内容の概要を示した。また先学の研究を概観し、本論文の位置を示した。続く本論は、個人蔵の『上棟一通』や多聞櫓文庫旧蔵の『柏木長十郎由緒書抜』など新発見の資料を提示しながら、小普請方大工棟梁・柏木家が所属する江戸幕府造営組織の実態を検討しながら、小普請方大工棟梁柏木家が二家体制であった様子について論じ、それぞれの柏木家についての系譜を提示した。また江戸幕府職制における小普請方の位置づけをより明確にするため、大工棟梁たちを統括する小普請奉行、上野方と呼ばれた組織の存在、小普請方諸大工棟梁の編成のあり方、建築儀式と大工棟梁の装束、そして小普請方大工棟梁という立場がどのような格を持っていたのかについて論じて、結論をまとめとした。

本論第1章「江戸幕府における小普請方大工棟梁」では、すでにその存在が知られていた竹中大工道具館所蔵の柏木家伝来の木割書『（柏木伊兵衛政等伝来目録）』（全五巻）について、仏堂の巻を例にとりながら、その内容の特徴について検証した。さらに、この度、筆者が新たに確認した個人蔵の造営儀式書『上棟一通』（全一卷）、ならびに『辰年御上棟之図』『辰年御規式之図』（二巻組）の絵巻物が、すべて小普請方大工棟梁柏木家伝来の資料である事を明らかとし、特に、『上棟一通』に関しては、作事方大棟梁甲良家が造営儀式の要領を収録した『工匠式』を伝えられたのと同じように、小普請方大工棟梁柏木家にもまた、甲良家に負けるとも劣らない造営儀式に関する家伝書が書き記されたことを述べ、『上棟一通』こそがまさに柏木家伝来の造営儀式書であることを明らかとした。

また、小普請方大工棟梁七家として知られてきた、柏木家（二家）、溝口家、小林家、大谷家、依田家、村松家、そして江戸後期になって小普請方大工棟梁としてその名を連ねる清水家について、文献資料を引きながらの各家について論じた。特に、本論文が主題とする柏木家二家については、各々の家柄の祖として、それぞれ柏木伊兵衛と柏木太郎右衛門が位置づけられる可能性を提示し、次章に

おける考証の足がかりとした。また、小普請方大工棟梁七家の中、まず最初に台頭してきたのが溝口家（溝口九兵衛）であることを指摘し、それにつづくのが柏木二家（柏木伊兵衛・柏木太郎右衛門）と小林家（小林惣左衛門）であることを述べ、清水家が小普請方大工棟梁家に加わる具体的な時期が、江戸後期の天保年間であることを指摘した。

そして、本章における重要な小結として、延宝八年武鑑に掲載されるよりも少し前の寛文期に、溝口家、柏木家（この時すでに二家の兆しがある）、小林家の三つの家柄が「三人扶持」という御役料をもって要職にあたっていたと思われること、その後、元禄期までの間に、右の三家に依田家・村松家・大谷家加わり、それら各家の家禄は高百五拾俵から十人扶持までに上昇したと考えられることを示した。この拾人扶持という御役料は、幕府役職の大工棟梁として一人前と認められた一つの証となる。それゆえ、『柏木長十郎由緒書抜』では、初代・柏木土佐の「拾人扶持」をことさらに強調していた。またこの時期は、いわば小普請方大工棟梁家の萌芽期にあたり、小普請方大工棟梁家が徐々に作事方をおびやかす存在となっていく。その後、元禄期になり小普請方大工棟梁各家が正式に肝煎りとして認められるようになると、作事方と小普請方の力関係は逆転し、小普請方大工棟梁管轄の幕府造営も増加してゆき、修理造営だけでなく新築造営にも小普請方が関与するようになるのであった。

第2章「小普請方大工棟梁柏木家の系譜」では、前章で指摘した柏木二家体制について、江戸時代を通して年次刊行されていた『武鑑』ならびに幕府の公日記であった『柳営日次記』を引きながら、延宝期から幕末に至る期間で「柏木」姓を名乗った小普請方大工棟梁について詳細に分析した。そこから得られた結果を、本研究が提示した新出資料『柏木長十郎由緒書抜』『柏木長十郎國名之儀取調候処』『大工棟梁柏木播磨養子願書付』などと照合することによって、これまで不明とされてきた「二家」の柏木家それぞれの系譜について考察を行った。それにより、柏木伊兵衛家を初代とする系図（初代～第十代）と、柏木太郎右衛門を初代とする系譜（初代～第十代）をそれぞれ明らかとすることが出来た。

上記『柏木長十郎國名之儀取調候処』を確認出来たことによって、小普請方大工棟梁が國名を拜命するにあたっては、『柏木長十郎國名之儀取調候処』にあるように、管轄する奉行等からの取り調べを受ける手続きを経て、江戸幕府が許可を与えるのが正式な國名の名乗り方であったことが判明した。このような一定の規定があったことを明らかとし、また國名拜命には、大きな造営に従事する際に造営儀式を執り行う前に國名が許されるケースと、また、元禄の護国寺上棟の例にあるように、普請後に褒美と共に受領されるケースの両方があったことを指摘し、それはいずれも、大工棟梁が大名との付き合いから國名を受領するといったものではなく、あくまでも、幕府が許可を与えたものが正式なものという認識であった点を論じた。

そして本章における重要な小結として、小普請方大工棟梁柏木二家の祖が、東叡山寛永寺鐘撞人の柏木家であり、元禄十一年に御公儀の修理所、つまり幕府肝煎りに任命されたとする説が、有力なものとして提示出来ることを明らかとした。

第3章「江戸幕府職制における小普請方大工棟梁」では、まず小普請方大工棟梁たちを管轄する小普請奉行の設置、一時廃止、再設置といった改廃の変遷をまとめた。ここでは、小普請奉行が幕府に設置されたのは貞享二年のことで、小普請奉行組頭とその配下の小普請方奉行がシステムとして稼働をはじめるのは元禄二年（一六八九）以降、そして、このような社会背景があつて、柏木家を含む小普請方大工棟梁たちが元禄十一年・十二年に幕府肝煎りに定められるに至ったことを指摘した。また、貞享二年という時期は、柏木家の『上棟一通』が作成された年あり、この貞享期こそが、小普請方大工棟梁各家が「定棟梁」としてその地位を確立し始めた重要な時期であることを明らかとした。

また、この貞享期に上野方という組織が存在したことを、『鈴木修理日記』を引きながら指摘した上で、柏木伊兵衛が造営儀式書『上棟一通』を記したのは、小普請奉行が設置された貞享二年のことで、その儀式書が書き記すことになった理由が、この「上野方」への参入目的であつたことを明らかとした。そして、「上野方」が記録に認められるのは、四代将軍家綱の霊廟を東叡山に造営した延宝八年と同時代のことで、これは、小普請方定棟梁の成立過程と一致し、なおかつ、延宝八年の小普請棟梁溝口九兵衛と「上野方」に関連が認められることから、柏木家の『上棟一通』が伝える「上ノ方」もまた東叡山寛永寺に関連する可能性を指摘した。

さらに、上野方が存在したのと同じ頃、小普請方大工棟梁の前身といえる小普請方定棟梁（破損方定棟梁）の職が成立した点を指摘し、小普請方大工棟梁七家中、組織の萌芽期に台頭したのが、まず溝口家であつたことを示した。

そして本章における重要な小結として、小普請方にも作事方の五十人棟梁にあたる諸大工棟梁から成る組織が存在したこと、また本論で紹介した新出資料『御規式役割』の作成された時期が、柏木貨一郎が先代の跡職に就いた慶応四年以降であること、ゆえに、この資料が小普請方大工棟梁の従えた諸棟梁延べ六〇余名を知ることのできる重要な記録であることを明らかとした。また、小普請方大工棟梁の格を示すものとして、國名（受領名）の上位に、杓（木工頭：もくのかみ）などの官途名が存在することを指摘した。

以上の内容をまとめ結論とした。

## 早稲田大学 博士（工学） 学位申請 研究業績書

氏名 佐々木 昌孝 印

(2014年11月 現在)

種 類 別	題名、 発表・発行掲載誌名、 発表・発行年月、 連名者（申請者含む）
論文	<p>佐々木昌孝・中川武、「造営儀式における諸棟梁の役割と装束について 小普請方大工棟梁の史料紹介を兼ねて」、日本建築学会『日本建築学会計画系論文集』第703号、2014年9月、pp.2023-2029</p> <p>佐々木昌孝・中川武、「小普請方大工棟梁柏木伊兵衛家の系譜」、日本建築学会『日本建築学会計画系論文集』第702号、2014年8月、pp.1791-1797</p>
研究紀要	<p>佐々木昌孝・中川武・坂本忠規・山崎幹泰・小岩正樹、「近世木割書『柏木伊兵衛政等秘伝書』五卷 その2 第一巻「御所様」(下)」、竹中大工道具館『竹中大工道具館研究紀要』第18号、2007年3月、pp.22-68</p> <p>佐々木昌孝・中川武・坂本忠規・山崎幹泰、「近世木割書『柏木伊兵衛政等秘伝書』五卷 その1 第一巻「御所様」(上)」、竹中大工道具館『竹中大工道具館研究紀要』第17号、2005年11月、pp.1-24</p>
講演	<p>佐々木昌孝、「近世造営組織における上野方について」、日本建築学会『日本建築学会大会学術講演梗概集』F-2、2014年9月</p> <p>佐々木昌孝、「江戸幕府小普請方大工棟梁家「柏木家」について」、日本建築学会『日本建築学会大会学術講演梗概集』F-2、2005年7月、pp.41-42</p> <p>佐々木昌孝、「「海老おり」という技法について」、日本建築学会『日本建築学会大会学術講演梗概集』F-2、2002年6月、pp.199-200</p>
著書	<p>木碎之注文研究会著・中川武監修『木碎之注文』、中央公論美術出版、2013年2月 (佐々木昌孝研究代表者科研費基盤C成果報告、全体の校訂と構成編集を担当)</p> <p>渡邊保忠（故人）著『日本建築生産組織に関する研究1959』、明現社、2004年12月 (全体の校訂と構成編集を担当)</p>